

# NEWS

独立行政法人 国立病院機構 呉医療センター・中国がんセンター

## 臨床研究部ニュース

広島県呉市青山町3-1 TEL 0823-22-3111

<http://www.kure-nh.go.jp>

発行責任者 臨床研究部長 谷山 清己



# タイ国立病院との姉妹縁組・第3回K-INT特集号



クイーン・シリキット病院との姉妹縁組

2010.10

vol.4

## CONTENTS

|   |    |
|---|----|
| タイ国立Queen Sirikit小児病院との姉妹縁組調印式                        | 1  |
| 国際学会参加報告  |    |
| Global Pediatric Health Care 2010 in Queen Sirikit    |    |
| National Institute of Child Health, Bangkok, Thailand | 3  |
| 第3回呉国際医療フォーラム   |    |
| 会長挨拶  | 5  |
| 祝辞  | 6  |
| 抄録  | 7  |
| 閉会挨拶/さよならパーティー挨拶                                      | 12 |
| 第3回呉国際医療フォーラム (K-INT) 概説                              | 13 |
| 研究部の紹介/御礼/編集後記  | 15 |



## タイ国立Queen Sirikit小児病院との姉妹縁組調印式

病院長 上池 渉

平成22年8月18日（水曜日）に、当センターとタイ国立Queen Sirikit小児病院（QSNICH）との姉妹縁組調印式（表紙図）をQSNICH講堂で行いました。当センターからは、筆者を団長として、臨床研究部長谷山、産科医長佐村、教育担当看護師長小杉、集中ケア副師長中原と検査技師田中の6人が出席しました。

姉妹縁組締結の目的（MOU）は、両病院の互恵的發展と人材交流を通して、両国国民の健康増進と発展に寄与するものであり（図1）、調印は、タイ国医療長官（Director General, Department of Medical Service, Thailand）であるDr. Rewat Wisutwetと筆者によって遂行されました。併せて、同調印式の証人として、QSNICH院長Dr. Siraporn Sawasdivornと谷山が署名しました（図2）。記念品贈呈式では、QSNICHから木彫りの象が贈られ（図3）、当センターからは世界の患者の快方を願って鶴の飾り扇子を贈呈しました（図4）。

調印式会場には、タイ国厚生省関係やQSNICH関連の人たちが沢山集い（図5）、終始笑顔に包まれて和やかな雰囲気でした（図6）。また、調印式後には、佐村医師と田中技師の招待講演（後述）が行われ、更に、場所を変えて、両病院の今後の協力関係を具体的に話し合う会議も続けて行われました（図7）。この会議では、QSNICH側から、タイ国における奇形児の全国登録システムを構築していく上での現状と問題点に関する報告があり、討議の結果、両国の資料を継続的に整理しつつ来年の第4回K-INT（呉国際医療フォーラム）開催時に、呉にて次回会議を行うことになりました。

今回の調印式は、第3回K-INTに参加したQSNICH側スタッフからの熱望により実現したものです。K-INTの設立目的が、当センターならびに呉・広島地区の国際化と国際医療人育成であることからすると、その目的に即して、当センターの国際活動が実績を残しつつ広がっていくことが実感され、嬉しく思っています。



図1. MOU



図2. 署名



図3. 木彫り象



図4. 鶴の飾り扇子



図5. QSNICH参加者



図6. 記念写真



図7. 会議風景

# Meeting Reports

Grobal Pediatric Health Care 2010  
in Queen Sirikit National Institute of Child Health,  
Bangkok, Thailand

**Clinical study of perinatal  
outcome in obese pregnant  
women**



**Osamu Samura, MD, PhD, Kei Okamoto, MD, Yoshie Kazusa, MD,  
Hiroko Nakamura, MD, Yousuke Kawakami, MD, PhD,  
Kazuhiro Takehara, MD, PhD, Tomoya Mizunoe, MD, PhD,  
Kiyomi Taniyama, MD, PhD, Wataru Kamiike, MD, PhD**

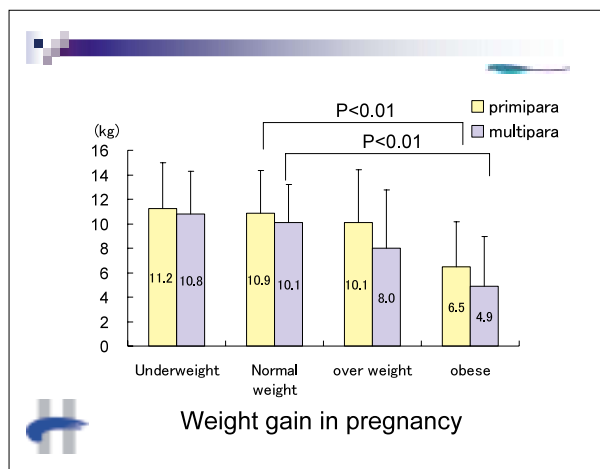


図 1.

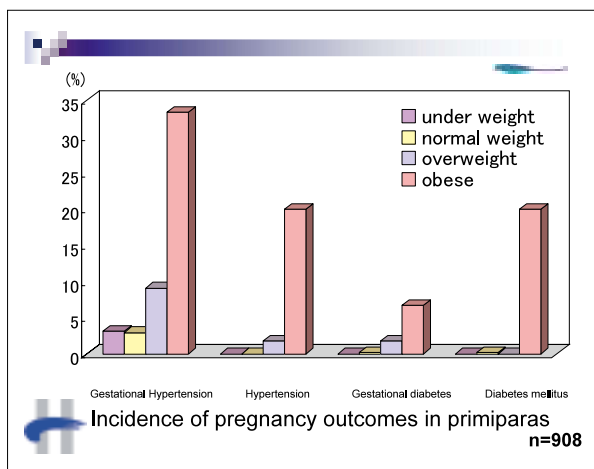


図 2.

筆者の行った講演の内容は、産科的ハイリスクと考えられる高度肥満症例の周産期予後に関する臨床的検討である。2007年1月から2008年12月までに当院であつかった単胎分娩症例1687例（初産婦908例、経産婦779例）を対象とし、非妊時体重からBMIを算出し、標準群（BMI 18.5以上25未満）と高度肥満群（BMI 30以上）に分けた。各群の症例数は、標準群1166例、高度肥満群41例（初産婦15例（1.7%）、経産婦26例（3.3%））で経産婦の方が高度肥満例の率が高かった。標準群および高度肥満群の体重増加（kg）は初産婦10.9±3.4、6.5±3.7、経産婦10.1±3.1、4.9±4.0といずれも高度肥満群で少なかった（図1）。初産婦の帝王切開率は標準群20.4%、高度肥満群53.3%、周産期死亡率は初産婦0.31%、6.7%であり、初産婦では帝王切開率、周産期死亡率が高度肥満群で有意に高率であった。母体合併症も高度肥満群で有意に高率であった（図2）。高度肥満初産婦は妊婦指導により体重コントロールを行っても合併症および帝王切開率が高く、慎重な周産期管理が必要となることを報告した。

# Meeting Reports

Grobal Pediatric Health Care 2010  
in Queen Sirikit National Institute of Child Health,  
Bangkok, Thailand

**Auto-analysis of immunohistochemical findings for breast cancers using specified software and virtual microscopy**



Miho Tanaka, MT, Kiyomi Taniyama, MD, PhD, Kazuya Kuraoka, MD, PhD, Akihisa Saito, DDS, PhD, Wataru Kamiike, MD, PhD

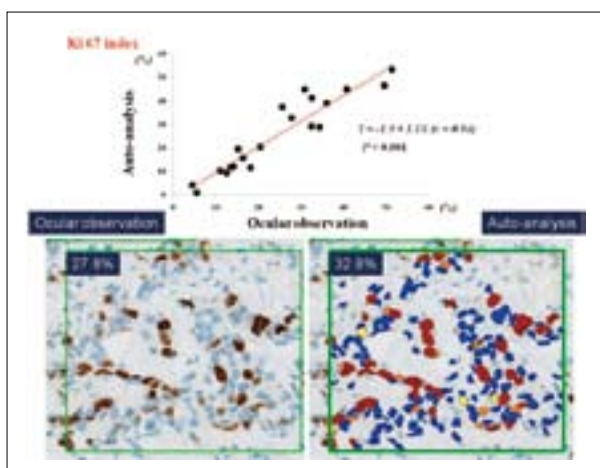


図1.

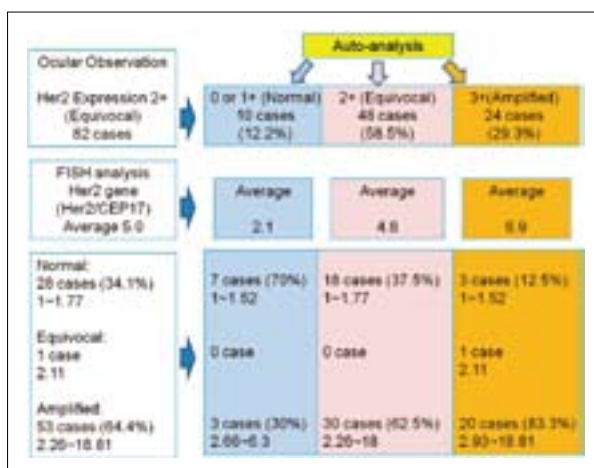


図2.

乳癌治療において病理診断と共に、免疫組織とFISHを用いた蛋白並びに遺伝子解析は、治療方針決定や予後予測に有用です。我々は、2010年2月より免疫染色自動画像解析装置とソフト（Genie）一体のシステム（アピリオ・テクノロジー株式会社）を導入しました。免疫染色標本をバーチャルスライド（浜松ホトニクス株式会社）で取り込み、前述システムを用いて自動解析しています。

同システムでは、指定範囲内の茶色の陽性細胞は赤・橙・黄色に、青色の陰性細胞は青色に変わり、陽性率を自動計算することができます。Ki-67（MIB-1）指数（図1）とTopo IIa指数の検討では、有意な（ $P < 0.001$ ）相関が認められました。また、免疫染色でHer2スコア2+の82症例についてFISH法結果との関係性を検討したところ、Her2スコアが0または1+と判定された症例の70%はHer2増幅がなく、一方、Her2スコアが3+と判定された症例の83.3%はHer2の増幅がみられました（図2）。

今後さらに検討を重ね、乳癌免疫染色組織化学染色の標準化へつなげたいと考えています。

# Greeting

## 第3回呉国際医療フォーラム 学会長挨拶



### Message from The President

President of the 3rd K-INT  
Wataru KAMIIKE, M.D., Ph.D.

Clinical Professor

第3回K-INT会長 上池 渉



第3回呉国際医療フォーラム（K-INT）が、日本の呉市に位置する当医療センターで開催され、皆様を招待できましたことを、同学会長として嬉しく思います。そして、皆様に歓迎の意を表します。

第3回K-INTでは、運営委員会が国際幹事などと緊密な連絡を取りながら構想をまとめてきました。そして、今回のトピックスは、「アジアにおけるがん化学療法—肺癌と消化管癌を中心として—」です。参加者全員による熱心な討論を経て、将来にわたって続くネットワークが形成されることを願っています。

呉市は、世界的に有名な広島市に隣接しており、景色が美しいばかりでなく、呉鎮守府や旧海軍基地などを有する歴史ある場所です。海上自衛隊呉史料館である“てつのくじら館”や“大和ミュージアム”では、これらの歴史を学ぶことが出来るでしょう。また、世界遺産である宮島を訪れることもできます。そこでは、神と人々が共に暮らしていると言われています。

皆様が呉滞在を楽しみ、そして、当学会が実りあるものになることを願っています。

### <トピックス>

#### アジアにおけるがん化学療法 —肺癌と消化管癌を中心として—

(要旨)

がん化学療法は、抗癌剤などを投与して、悪性腫瘍を破壊したり、その増生を阻害するものである。抗癌剤は適量投与されなければならない。少なければ効果が弱く、また、過量では患者が耐えられない。本学会では、発展してきたがん化学療法について、肺癌と消化管癌を中心として討論すると共に、アジア人の特徴を明らかにする。

THE 3rd KURE INTERNATIONAL  
MEDICAL FORUM (K-INT)  
第3回呉国際医療フォーラム IN 2010  
CHEMOTHERAPY IN ASIA  
— LUNG and GI CANCER —  
July 23, 24, 25  
AT National Hospital Organization  
Kure Medical Center /  
Chugoku Cancer Center

●会 長：上池 渉 (総長)  
●開催期間：2010年7月23日・24日・25日  
●開 催：国立病院機構呉医療センター・  
中国がんセンター  
●会 場：呉医療センター 4F  
柳屋国際研修センター

【問い合わせ先】  
〒737-6023 呉市青山町3-1  
国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター内 呉国際医療フォーラム事務局  
TEL: 0823-231111 FAX: 0823-211978

# Meeting Reports

## 第3回呉国際医療フォーラム 祝辞



### 小村呉市長

県内外、国外からの経験豊富な医師の来院を心から歓迎します。また、国際学会を開くのは大変な作業であって、大きなエネルギーを必要と思います。関係者の皆様に敬意を表します。

第3回呉国際医療フォーラムは、癌がテーマと聞いています。日本人の3人に1人が癌で死亡しているので、癌を予防、克服していく事は人類の悲願だと思えます。このフォーラムが実り多いものになる事を心からお祈り申し上げます。

呉市は先般、15万人以上の都市では高齢化率がトップだという新聞記事が出ていました。私は、呉市は日本一長寿であり、季候がよく、医療が非常に充実した結果であるので、これは誇れるものだと考えています。健康で自分の事は自分でできる健康寿命を長くするために「健康の日」を作りました。「自分で健康を管理し、運動して生活を送る」これが、豊かさという事です。それには医療に携わる皆様にお世話をいただかなければいけません。呉市としても努力をしていきます。

重ねて、このフォーラムが実り多くなる事と、呉市の医療がますます充実する事をお祈りし、挨拶いたします。



### 豊田呉市医師会長

呉で国際フォーラムが続けて開催される事は、呉市の医療関係者にとってうれしい事です。呉は広島県の中でも医療に恵まれています。それでも救急医療、終末期医療に関して問題が生じています。癌に関しては、ここ10年20年の間に延命治療が沢山行われるようになり、抗がん剤治療も非常に成果を上げていますが、それと同時に、患者の管理という事が大きな問題となっています。

在宅管理では、どういう風に最後を人間らしく生きていく事ができるかという共通の問題に関して色々なことを努力していかなければなりません。看護師など医療従事者の方々の協力が必要です。

呉に呉医療センターがあるおかげで、我々呉の住民は安心して2次3次を任せて寄りかかってしまっていますが、呉の住人にとって、また、広島県の住民、日本の住民にとって良い医療が行われるよう、みんなと一緒に努力していきたいと思えます。

7月23日 17:35 - 18:30

## “Chemotherapy for Child Cancer”

Chaired by Takeo TANAKA, M.D., Ph.D.

セッション名; “小児がんの化学療法”

座長 国立病院機構 広島西医療センター 院長

田中 丈夫



17:40 - 17:55



Wilm's Tumor with Metastasis to Duodenum

-The First Reported Case in Thailand.

Niyada VITHAYASAI, M.D.

十二指腸に転移したウイルムス腫瘍-タイでの初の報告

タイ・クイーン・シリキット病院 Niyada VITHAYASAI

症例は1歳10ヶ月のウイルムス腫瘍、stage IIIの女児。腫瘍を摘出し、放射線療法、化学療法を1年間行った。しかし、その後、吐血を認め、消化管閉塞を発症した。消化管内視鏡にて十二指腸球部に消化管内腫瘍を認め、組織学的にウイルムス腫瘍と確認した。

17:55 - 18:10



Case Report: Hepatocellular Carcinoma in Children Presents With Massive Upper GI Bleeding

Siriluck JENNUVAT, M.D.

症例報告：小児の肝細胞癌は上部消化管出血を呈する

タイ・クイーン・シリキット病院 Siriluck JENNUVAT

小児における肝細胞癌は珍しく、100万人に0.5から1人である。主症状は腹部腫瘍であるが、本症はHBウイルス陽性、肝細胞癌の9才女児、食道静脈瘤からの出血にて搬送された。消化管内視鏡で硬化療、Sengstaken-Blackemoreチューブなどを用いて止血処置を行ったが、効果乏しく永眠された。B型肝炎予防ができなかった症例であった。

18:10 - 18:30



Hepatoblastoma, experience from QSNICH.

Somjai KANJANAPONGKUL, M.D.

QSNICHにおける肝芽腫の検討

タイ・クイーン・シリキット病院 Somjai KANJANAPONGLUL

肝芽腫は小児肝悪性腫瘍で最も多い。治療は腫瘍拡大切除が必要で、進行例には化学療法の後腫瘍摘出を行う。我々は2003年から2008年までQSNICHでの肝芽腫症20例の治療成績を後方視的に検討した。シスプラチン、VCR/5FU群とシスプラチン、ドキソルビシン群について検討したところ前者の方が効果的であった。しかし、手術不能例については良好な結果は得られていない。



7月24日 9:30 - 11:30

## “Chemotherapy for G - I Cancers”

Chaired by Hiroyuki NARAHARA, M.D., Ph.D.

セッション名; “消化管癌の化学療法”

座長 広島大学大学院 医歯薬学総合研究科

がん治療学研究室 教授 梶原 浩之



9:35 - 9:55



Targeting Tumor Cells and Stromal Cells for Therapy of Human Colon Cancer  
Toshio KUWAI, M.D., Ph.D.

大腸癌の治療における腫瘍細胞および間質細胞のターゲティング  
呉医療センター・中国がんセンター 消化器科 医長 桑井 寿夫

EGFR、VEGFR、PDGFRシグナル伝達系は、大腸癌の浸潤転移に重要な役割をはたしていることが報告されている。大腸癌同所移植ヌードマウスモデルに対し、EGFRとVEGFRのチロシキナーゼ阻害薬（TKI）であるAEE788と、PDGFR $\beta$ のTKIであるSTI571、およびCPT-11を用いて単独および併用治療を施行し、その効果を検討した。その結果、AEE788、STI571、CPT-11の3剤併用療法が最も効果を認めた。

9:55 - 10:25



Current Status of Palliative Chemotherapy in Advanced Gastric Cancer  
Sun Young RHA, M.D., Ph.D.

進行胃癌における緩和的化学療法の現状  
韓国・ヨンセイ大学 准教授 Sun Young RHA

現在、進行胃癌に対する全世界で受け入れられているグローバルスタンダードな化学療法のレジメンは存在しない。しかし、アジアでは日本や韓国で行われた試験結果を元に、5-FUのプロドラッグであるS-1の単独あるいは併用療法が通常施行されている。現在、新規の抗癌剤併用療法に関する試験も進行中で、最近では新規分子標的治療薬に関する併用療法の試験も始まっており、今後のさらなる発展が期待される。

10:25 - 10:55



Optimal Nutrition Support in Cancer Patients at University Malaya Medical Centre

Kin Fah CHIN, MB, ChB, M.D., FRCSGlasg, FRCS(Gen Surg)  
マラヤ大学医療センターにおける癌患者に対する適切な栄養管理  
マレーシア・マラヤ大学 外科 教授 Kin Fah CHIN

外科病棟の患者は低栄養の発生率が高く、そのほとんどが癌患者であり、適正な栄養管理が状態改善に不可欠であると思われた。また、進行大腸癌24人に対しFU剤と抗VEGF抗体の併用療法を施行し、3人がCR、7人がPR、9人がSDであった。一方、副作用はほとんどがGrade1-2であった。以上より抗VEGF抗体療法はマレーシアでも有効な治療法であると考えられた。

10:55 – 11:25



Prognostic Factors for Survival in Colorectal Cancer Patients.  
Sudsawat LAOHAVINIJ, M.D., Ph.D.  
直腸癌患者の生存に関する予後因子  
タイ・ラジャピチ病院 Sudsawat LAOHAVINIJ

大腸癌StageI-IVの患者287例の予後因子について検討した。15の臨床病理学的項目を検討した結果、多変量解析により年齢（60歳以上）、PS（3）、Stage（III and IV）、および低分化型腺癌が予後不良因子としてあげられた。一方で治癒切除および術後補助化学療法により良好な予後結果が得られた。今後は癌の早期発見および、新規薬剤による治療が高リスク群の予後改善につながると思われる。

7月24日 13:55 – 15:20

## “Chemotherapy for Lung Cancer”

Chaired by Nobuoki KOHNO, M.D., Ph.D.

セッション名; “肺がんの化学療法”

座長 広島大学大学院 医歯薬学総合研究科

分子内科学教室 教授 河野 修興



14:00 – 14:20



Efficacy of Erlotinib for Carcinomatous Meningitis in Non-Small-Cell Lung Cancer Patients with Epidermal Growth Factor Mutations.  
Kikuo NAKANO, M.D., Ph.D.  
EGFR遺伝子変異を有した非小細胞肺癌の癌性髄膜炎に対するエルロチニブの治療効果  
呉医療センター・中国がんセンター 呼吸器科 科長 中野 喜久雄

進行非小細胞肺癌による癌性髄膜炎の予後は生存期間中央値5カ月と不良である。今回、本疾患11例に対しEGFR阻害剤エルロチニブの効果を検討した。結果は年齢中央値が64歳で、神経症状とPSが改善した7例のうち5例がEGFR遺伝子変異を有し、さらにEGFR遺伝子変異例の生存期間中央値が13.1ヶ月であった。結論は、エルロチニブがEGFR遺伝子変異を有した非小細胞肺癌患者の癌性髄膜炎に対し有効な治療法である。

14:20 – 14:40



Current Status and Challenges of Palliative Care for Patients with Terminal Lung Cancer in General Hospital in Japan  
Masaomi MARUKAWA, M.D., Ph.D.  
急性期当院における肺癌症例の終末期緩和ケアの現状と課題  
福山医療センター 臨床研究部長 丸川 将臣

肺癌は診断時に多くの症例が進行した状態で発見され予後も不良であることが知られており、抗癌治療と同時に緩和ケアとしての対応が病気の進行・増悪とともに重要な役割を持つと考えられている。今回われわれは当院と関連施設で看取りを行った肺癌65症例について死亡前1か月間の主な症状と緩和ケアの関わりについてレトロスペクティブに解析した。肺癌の終末期に対応すべき主な症状として呼吸困難、癌性疼痛、倦怠感、せん妄などが

再確認され、看取りについて約8割が急性期病棟で行われている現状が明らかとなった。生命予後、病状の変化や本人、ご家族の意向のみならず本来の急性期病棟の持つ役割を考えると、終末期の医療連携の在り方について検討の余地があると思われた。

14:40 – 15:00



Metastatic Bone Disease from Lung Cancer

1. Measurement of ICTP in lung cancer patients with or without bone metastasis
  2. Adding zoledronic acid therapy to chemotherapy for patients with bone metastasis in stage IV non-small cell lung carcinoma
- Osamu FURONAKA, M.D., Ph.D.

肺癌骨転移

1. 肺癌患者における骨転移の有無とICTP値の測定について
2. 骨転移を有するIV期肺癌患者における化学療法とゾレドロン酸併用療法について

JA尾道総合病院 呼吸器内科 主任部長 風呂中 修

ICTP値は、骨転移なし群において平均4.7ng/ml、一方、骨転移あり群では平均9.0ng/mlであり、2群間で有意差を認めた。IV期非小細胞肺癌を、骨転移があり化学療法とゾレドロン酸併用療法を行った群と化学療法のみを行った群の2群に分け全生存期間を比較したところ、ゾレドロン酸併用療法群において全生存期間は有意に長く、ゾレドロン酸併用群では1次化学療法から2次化学療法への移行率が有意に高い傾向にあった。肺癌骨転移例に対して化学療法にゾレドロン酸を併用することにより、骨関連事象が軽減し、PSの維持などによる化学療法の継続が全生存期間の延長に寄与したのではないかと推察した。

15:00 – 15:20



Current Status of Non-Small Cell Lung Cancer Chemotherapy at Kure Kyosai Hospital

Yutaro SHIOTA, M.D., Ph.D.

呉共済病院における非小細胞肺癌の化学療法の現状  
呉共済病院 呼吸器科 部長 塩田 雄太郎

呉共済病院で2009年から約1年間に抗がん剤治療を行った非小細胞がん患者を検討した。症例は32例であった。年齢は51歳から88歳で、男性20名、女性12名であった。組織学的には腺癌が68.8%、扁平上皮がんが21.9%であった。1st lineの抗がん剤はCBDCA+PTXが64%、Gefitinibが20%であった。2nd lineの抗がん剤もほぼ同様であった。今後も進展する肺癌の治療に対応していくことが重要と考えられた。

7月24日 15:30 – 17:15

“Chemotherapy for Asian People”

Chaired by Yoshiyuku YAMAGUCHI, M.D., Ph.D.

セッション名; “アジア人に対する化学療法”

座長 川崎医科大学 臨床腫瘍学研究室

教授 山口 佳之



15:35 – 15:55



Recent Advances in Chemotherapy of Metastatic Colorectal Cancer  
Yoshiyuki YAMAGUCHI, M.D. Ph.D.  
再発大腸癌化学療法における近年の進歩  
川崎医科大学 臨床腫瘍学 教授 山口 佳之

再発大腸がん化学療法の30年の進歩は著しい。キードラッグは5FU/ロイコボリン (LV)、CPT-11, オキサリプラチン (OX) と、分子標的治療薬ベバシズマブ、セツキシマブ、パニツムマブであり、腫瘍縮小率は50%を、平均生命予後は2年を超えている。実地臨床として、OXベースレジメンで腫瘍を縮小し切除して治癒を狙う戦略と、5FU/LVをベースにOXをon/offし、維持には経口5FU剤でメトロノーム化学療法を導入しがんと共存する戦略、これらを区別する考え方を報告した。

15:55 – 16:15



A Feasibility Study of Postoperative Adjuvant Therapy of Carboplatin and Weekly Paclitaxel for Completely Resected Non-Small Cell Lung Cancer.  
Yoshinori YAMASHITA, M.D. Ph.D.  
完全切除非小細胞肺癌に対するカルボプラチンおよび週1回パクリタキセルによる術後補助化学療法の忍容性研究  
呉医療センター 呼吸器外科 科長 山下 芳典

非小細胞肺癌 (NSCLC) stage IB、II、IIIA期NSCLC完全切除例61例に対する術後補助化学療法、カルボプラチンおよび週1回パクリタキセルによる補助化学療法の良い忍容性を報告した。中央値で4サイクル施行し、Grade 3または4の好中球減少が34%に発現したが、Grade 4は2%のみであった。末梢神経痛の発現率は月1回のパクリタキセルの投与に比べ低く、治療関連死は報告されなかった。

16:15 – 16:45



Endoscopic Ultrasound-Guided Biliary-Gastroenteric Bypass for Advanced Malignant Biliary Obstruction.  
Sukij PANPIMANMAS, M.D., FRCST. FICS.  
進行悪性胆道閉塞に対するEUSガイド下胆管胃腸バイパス  
タイ・ラジャビチ病院 外科 Sukij PANPIMANMAS

進行した悪性胆管閉塞患者への緩和治療として、ERCPが成功しなかった胆管閉塞による重症黄疸患者14例に対し、EUSガイド下にカバードメタリックステントを留置する胆管胃腸バイパスを施行した。12例で成功し10人では効果的に減黄が可能であった。進行癌による胆管閉塞へのEUSガイド下胆管胃腸バイパス術は、腫瘍から遠いためステントの長期開存が期待され、QOLの改善などの面から安全で有用な緩和的治療法である。

16:45 – 17:15



Pharmacogenetic Variations between Caucasians and Asians: Can They be Used to Estimate Differences in Toxicity and Response to Chemotherapy in Colorectal Cancer Patients?  
Richie SOONG, Ph.D.  
白人とアジア人の薬理遺伝学的差異：大腸がん患者において化学療法の毒性発現と臨床効果の差を予測しえるか？  
シンガポール大学 診断分子腫瘍学 講師 Richie SOONG

遺伝子発現には人種間で差異が認められることより、大腸がん患者における癌細胞の遺伝子発現と抗がん剤（フルオロピリミジン）に対する毒性の発現と臨床効果について過去の文献を元に、人種間で比較分析を行なった。大腸がんにおいては、多くの遺伝子で発現頻度において人種間に差が認められ、アジア人は白人より毒性の発現頻度が低い一方、臨床効果においては人種間による差は認められなかった。

## 第3回K-INT 閉会式



### 閉会挨拶

Vice-President of the 3rd K-INT  
Katsuyuki MORIWAKI, M.D., Ph.D.

### 第3回K-INT副会長 森脇 克行

第3回KINT組織委員会を代表して、閉会の辞を述べさせていただきます。今回は“アジアの化学療法”と題して、肺がん、消化器がん、小児がんの領域の話題を中心に、アジアの5カ国から15人の演者と座長をお招きしました。臨床に役立つ多くの知識や考え方を共有しアップデートすることができたと思います。最後に、フォーラムにご協力いただいた、呉医師会、呉市と市民ボランティア、当院看護学生など多くの方々に感謝の意を表します。

## 第3回K-INTさよならパーティー 挨拶



### さよならパーティー挨拶

Vice-President of the 3rd K-INT  
Ms. Terumi Aoshiba, Deen of Nursing Unit

### 第3回K-INT副会長 青芝 映美

海外からお越し頂いた皆様には心から感謝申し上げます。  
皆様のご協力により、第3回K-INTを成功のうちに終えることができました。  
このK-INTは、学究的な会議ではありますが、目的は単にそれだけではなく、お互いの深い親交にあるということは皆様もご承知のとおりです。  
このさよならパーティーは、私たちの感謝の気持ちです。  
皆様、どうぞ楽しんでください！

## 第3回呉国際医療フォーラム（K-INT）概説

K-INT事務局長 谷山 清己

第3回K-INTは、7月23日（金曜日）午後5時から開始された。小村呉市長、豊田呉市医師会長の祝辞の後に、学会長である上池院長が開会宣言を行った。引き続いて、広島西医療センター田中院長を座長として、セッション“小児癌の化学療法”が開催された。タイ国立クイーンシリキット小児病院消化器・栄養科から、Vithayasai部長と Senuvat医師、血液科からKanjanapongkul医師が発表した。その後、第3回K-INT開催を祝って、当院附属看護学校応援団による応援歌や踊りとハンドベル演奏（図1）が披露され、更に、市民ボランティアによる民謡（図2）や踊りが繰り広げられた。場所を変えた会長招宴会では、各国からの参加者と当センター職員が楽しく歓談し、タイからの参加者から当センターへの記念品贈与が行われるハプニングも発生した。



図1.ハンドベル



図2.民謡

2日目となる7月24日（土曜日）は、午前9時半からスタートした。午前の部は、セッション“消化管癌の化学療法”であり、広島大学大学院がん治療学植原特任教授司会の下に、当センター消化器桑井医長、韓国ヨンセイ癌センターRha医師、マレーシアマラヤ大学Chin教授、タイ国立ラジャビチ病院Laohavinij医師による発表があった。

ランチョンセミナーでは、広島県立病院篠崎医師による講演“外来抗癌剤投与の適切な運用”が行われた。その間、来賓や外国からの参加者を対象として、当センター看護学校茶道部による茶道披露（図3）があり、学生ボランティア提供による浴衣を着た女性参加者達と看護学生が記念写真を撮るなどの交流が盛り上がった。

全体の記念写真（図4）が撮影された後、2日目午後の部は、“肺癌の化学療法”と“アジア人の化学療法”という2つのセッションが続けて行われた。それぞれ、広島大学大学院医歯薬学総合研究科分子内科学河野教授と川崎医科大学臨床腫瘍学山口教授が座長となった。発表は、前半が、当センター中野呼吸器科長、福山医療センター丸川臨床研究部長、尾道総合病院風呂中呼吸器科部長と呉共済病院塩田呼吸器科部長であり、後半は、前述山口教授、当センター山下呼吸器外科長、タイ国立ラジャビチ病院Panpimanmas外科部長、シンガポール大学診断分子腫瘍学Soong講師であった。そして、学会副会長である森脇副院長が次回の予定などを伝えた後に閉会宣言を行った。



図3.茶道

大会3日目となる7月25日（日曜日）は、外国からの参加者と看護学生、当センター職員などが混じった自由討論会であり、アジアにおける将来の医療などについて自由闊達な議論が宮島にて行われた（図5）。

全体を通して、学会参加者および事務局全員の積極的な関与が円滑に行われ、学会は成功裏に終了した。参加者は初日が261人、2日目が238人、3日目が42人であった。各発表内容は、本ニュース前稿をご参照いただきたい。学術的にも、また、親睦を深める意味においても、本学会は満足いくものであった。本年8月18日に行われたタイ国立クイーンシリキット小児病院との姉妹縁組が円滑に済んだのも本学会の成功が深く関わっている。来年の第4回も更に盛会となることを願っている。



図4. 全体の記念写真



図5. 宮島

## 研究部の紹介



院外研究生  
梶谷 直人

広島大学大学院 医歯薬学総合研究科  
薬効解析科学研究室 修士1年生  
精神神経科学研究室 院外研究生  
抗うつ薬の作用機序に関する研究



院外研究生  
矢野 遼也

広島大学大学院 医歯薬学総合研究科  
薬効解析科学研究室 修士1年生  
精神神経科学研究室 院外研究生  
抗うつ薬の作用機序に関する研究

## 御 礼

### (国際的活動を中心とした臨床研究部への寄付金)

呉医療センター医局OB会  
用途：国際活動を中心とした研究支援

## 編集後記

第4回臨床研究部ニュースは、タイ国立クイーン・シリキット病院との姉妹縁組および第3回K-INTの特集号としました。当センターが「両病院の互恵的發展と人材交流を通じた両国国民の健康増進と発展への寄与」および「国際的医療人育成と地域医療活性化」を目標に国際活動に取り組んでいることが紙面を通して皆様に伝われば幸いです。第3回K-INTの開催に際しては県内病院の関係各位や当センター看護学校の協力があって成功裡に終わりました。この場をおかりして厚く御礼申し上げます。第5回臨床研究部ニュースは、本年の学術活動を、特に国際的な活動を中心にして紹介する予定です。ご期待下さい。

M.T.